

# 発達障害のある女子高校生の学校不適應に関する実態把握

三浦 巧也	東京農工大学大学院工学研究院
林 安紀子	東京学芸大学特別支援教育・教育臨床サポートセンター
廣野 政人	東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科
洲上 真裕美	東京学芸大学大学院教育学研究科
竹達 健顕	東京学芸大学大学院教育学研究科
堂山 亞希	目白大学大学人間学部

**要 旨：**発達障害(その可能性)のある女子高校生に特有の学校不適應の現況について、養護教諭を調査協力者として実態把握し、彼女らへの適切な支援方法の視座を得ることを目的とした。発達障害のある女子高校生に対する個別支援事例をテキストマイニングによって整理した。その結果、入試時の偏差値群および修学上の困難さといった外部変数によって、彼女らの学校不適應に関する特徴が確認された。最後に、思春期の発達障害のある女子生徒の特性から派生する二次的な心理的問題について言及した。

**Key Words：** 発達障害, 女子高校生, 学校不適應, テキストマイニング

## ● I. はじめに

文部科学省<sup>6)</sup>によると、中学3年生(約17000人)を対象とした調査では、発達障害(その可能性がある：以下省略)等困難のある生徒は、2.9%であり、そのうち75.7%が高校へ進学している(全日制へは1.8%、普通科へは2.0%)。また、高橋・内野<sup>13)</sup>は、首都圏1都3県の高校496校(回収率36.9%)のうち、122校(24.6%)に発達障害のある生徒が在籍していることを示した。発達障害のある中学生の7割以上が高校に進学しており、首都圏では約2.5割の学校に在籍している事実を鑑みると、当該高校生への学校適應を支えるための仕組みが喫緊の課題であると考えられる。

しかしながらこれらの研究では、性差について論じられることはなかった。特に、思春期の発達障害のある女子生徒の実態については、疫学調査で見られる有病率の低さと、女性の症状の見えにくさから、これまで焦点がほとんど当てこなかった。臨床的に注意深く経過を追っていると、周囲から見落とされて、後々大きな危険性を孕むことがあると指摘されている<sup>3)</sup>。そして、高校に入学した発達障害のある女子生徒は、中学校校までの「守られた環境」から、ほとんど知らない女の子たちに囲まれて、全く未知

数である女子高生文化という新たな環境へ進むことが本当に試練となると危惧されている<sup>3)</sup>。

そこで本研究では、思春期というとらえどころがない心の動揺を体験する時期において、発達障害がある女子高校生の心理発達の課題(特性)に起因する学校不適應の現況を把握し、彼女らの学校適應を促す最適な支援方法の視座を得ることを目的とする。

## ● II. 方法

### 1. 実施期間・回収方法

2017年7月に、郵送法にて実施した。

### 2. 調査協力者

無作為抽出によって選定された首都圏の公私立高校(共学校・女子校)400校の養護教諭を協力者として調査を依頼した。本研究では、学校保健の立場から高校に在籍する全ての生徒と関わることがあり、生徒の身体面・精神面の状況を総合的に把握することができる<sup>12)</sup>、養護教諭を調査協力者とした(勤続年数平均18.0年(SD=11.2)、勤務校在職年数平均7.5年(SD=8.4))。224校からの回答を得た(56.0%)。

調査を依頼した学校の管理職・養護教諭には、

目的とプライバシー保護のための手立てを書面にて説明し、回答をもって同意を得た。なお、心理発達の課題(特性)に起因する学校不適応の現況について、例えば大学進学率によって大別した群によって生徒の学校適応状態に差異があることが確認されている。高等学校を一括りにするのではなく、学校のタイプを考慮した検討の重要性が指摘されている<sup>9)</sup>。そこで本研究では、高校入試時の偏差値も変数として分析を実施した。

### 3. 調査内容

#### 3.1. フェースシート

回答者である養護教諭の勤続年数、在職年数、勤務校における高校入試時の偏差値についてたずねた。高校入試時の偏差値については、進学塾等が発行する書籍やホームページを参照し、「偏差値 50 以下」「偏差値 51~60」「偏差値 61 以上」のいずれか1つを選択してもらった。

#### 3.2. 個別事例における発達障害のある女子生徒の実態及び支援

(1) 発達障害のある生徒への個別支援の実態の有無についてたずね、「支援の経験がある」と回答した養護教諭を対象に、「当該生徒について、男子生徒には見られない女子生徒特有の学校生活上に関する不適応の具体例」について、自由記述式の質問項目を設けた。

(2) 修学上の困り感について、松下・福盛・一宮<sup>10)</sup>の発達の修学困難チェックシートを用いた。各項目に対して、「あてはまる(3点)」～「あてはまらない(0点)」の4件法でたずねた。このチェックシートは2因子で構成されており、「友人関係を築くことの困難」因子と「修学上の不器用さ」因子の得点が算出される。

### 4. 分析方法

発達の修学困難チェックシートについては各因子の信頼性係数を算出し、内的整合性を検討した。また、高校入試時の偏差値における個別事例生徒の特徴に関する比較を検討した。

発達障害のある女子生徒特有の学校生活上に関する学校不適応の具体例については、自由記述で得られた内容をテキストデータに置き換えた。その後、誤字脱字の修正、表記の統一(例：自閉・広汎性発達障害・アスペルガー→「ASD(自閉スペクトラム症)」)を行った。加えて、複数の内容が含まれている記述は、まとまりごとに文章を分解した。そして、テキストデータについて、形態素解析を行い出現回数が1回以上の語を用いて、計量テキスト分析システム KH

Coder による共起ネットワーク分析を行った。

共起ネットワーク分析は、出現パターンの似通った抽出語、すなわち共起の程度が強い語を線で結ばれ関連性を把握するために用いる分析手法である。本研究では、サブグラフ検出(modularity)による検討を行った。サブグラフ検出では、相対的に強くお互いに結びついている単語同士を自動的に検出してグループ分けを行い、ネットワーク図によって示すものである。それぞれの単語グループは色分けされる。サブグラフ検出を行った場合、同じサブグラフに含まれる単語は実線で結ばれる。この分析では、出現数の多い語ほど大きい円で示され、強い共起関係ほど太い線で示される。そして、抽出されたグループについて、筆者ら臨床心理学を専門としている大学院生・教員によって内容的妥当性を検討した上で独自にグループ名を命名した。

当該女子高校生の個別事例における学校不適応の具体例について、まずは全体の傾向を検討した後、得られた分析データについて高校入試時の偏差値を外部変数とした共起ネットワーク分析を行った。加えて、発達の修学困難チェックシートの「友人関係を築くことの困難」因子と「修学上の不器用さ」因子の平均値+1SD以上の得点群、すなわち修学上における困難さが特に高い生徒を抽出して、彼女らの学校不適応の現況を把握するため、同様の分析を行った。

## III. 結果

### 1. 調査協力校における入試時の偏差値について

回答が得られた224校において、高校入試時の偏差値は50以下群が91校(22.8%)、51-60群が58校(25.9%)、61以上群が46校(20.5%)、不明が29校(12.9%)であった。

### 2. 個別事例における発達障害のある女子高校生の実態について

#### 2.1. 個別事例の件数

これまでに養護教諭が個別に支援を行った事例の有無についてたずねたところ、支援した経験があると回答したのは、161件(71.9%)であった。また、高校入試時の偏差値別に集計を行ったところ、50以下群が67件(41.6%)、51-60群が42件(26.1%)、61以上群が33件(20.5%)、不明が19件(11.8%)であった。

## 2.2. 共起ネットワーク分析における当該女子 高校生の特徴

個別事例における当該女子高校生について、男子生徒には見られない女子特有の学校生活上に関する不適応の具体例について自由記述でたずねた。161件中、87件の記述データが得られた(54.0%)。共起ネットワーク分析を行った結果、「友人関係の難しさ」「周囲とのトラブル」「異性との関係性の問題」「クラスからの孤立」「空気が読めないことに起因する傷つき」の5つのグループが抽出された(Fig.1)。

次に、高校入試時の偏差値を外部変数として分析をした。分析には、87件中76件の記述データを用いた(87.4%)。共起ネットワーク分析を行った結果、全ての偏差値群に共通して、「周囲・グループとの関係」「コミュニケーション上のトラブル」「性に関する問題」の3つのグループが抽出された。また、各偏差値群の特徴として、外部変数と太い線で結ばれた単語に注目すると、偏差値50以下群では「孤立(した状態)」、51-60群では「(逸脱)行為」、61以上群では「苦手(意識)」が抽出され、各偏差値群との関連性が強いことが推測された(Fig.2)。

個別事例における発達障害のある女子生徒の発達の修学困難についてたずねた。チェックシート<sup>10)</sup>における「友人関係を築くことの困難」因子は $\alpha=.70$ 、「修学上の不器用さ」因子は $\alpha=.84$ となり、内的整合性は十分に得られた。高校入試時の偏差値群による比較を行ったが、全ての項目で有意差がみられなかった(Table 1)。そこで、各因子において、平均値が高い項目に注目すると、「友人関係を築くことの困難」因子では、「場の雰囲気を読んでそれに合わせる事ができず、周囲から浮いてしまう」が最も高い得点であった(平均値=2.36(SD=0.75))。「修学上の不器用さ」因子では、「二つ以上の作業を同時にこなそうとすると、混乱してしまう」が最も高い得点であった(平均値=1.88(SD=0.95))。

次に、各因子について、平均値+1SD以上の得点、すなわち困難さの度合いが高い生徒の事例を抽出した。「友人関係を築くことの困難」因子では、平均値(=9.96)にSD(=2.98)を加算し、因子得点が高い群16件(18.4%)を抽出した。また、「修学上の不器用さ」因子では、平均値(=10.63)にSD(=4.43)を加算し、因子得点が高い群9件(10.3%)を抽出した。

「友人関係を築くことの困難」因子得点が高い群において共起ネットワーク分析を行った結果、「SNS・性に関するトラブル」「障害に起

因するグループ・友人関係の不和」「独特な興味・関心による疎通の難しさ」の3つのグループが抽出された(Fig.3)。「修学上の不器用さ」因子得点が高い群において共起ネットワーク分析を行った結果、「性に関する課題」「対人とのトラブル」「落ち着きのない言動」「孤立した状態」「衝動的な言動で誤解されやすい」「欲求が抑えられずに行動してしまう」の6つのグループが抽出された(Fig.4)。

## ● IV. 考察

### 1. 発達障害のある女子高校生の特徴

本研究では、養護教諭がこれまでに個別支援を行った発達障害のある女子高校生の実態に関する把握を試みた。個別支援事例において、発達の修学困難には高校入試時の偏差値による有意な差はみられず、共通して「場の雰囲気を読んでそれに合わせる事ができず、周囲から浮いてしまう」ことや、「二つ以上の作業を同時にこなそうとすると、混乱してしまう」ことが学校不適応として示された。しかしながら、自由記述をもとに共起ネットワーク分析を行った結果、それぞれに特徴がみられた。

偏差値が50以下の高校における個別支援事例では、孤立した状態にあることに関連性が強く示された。このことは、発達の修学困難における不器用さの度合いが高い生徒の支援事例でも確認された。発達障害のある女性の当事者<sup>9)</sup>が高校時代を振り返り、人間関係や対人処理方法は中学生と比べ一層高次になり、より大人びてクローズドの世界のものとなり、一度も他者が「何を考えているか」分かることなく砂を噛むような毎日だったと述べている。そして、彼女らは、「白か黒か」のような極端な感じ方や考え方を示す傾向を示し、過度に極端な態度、周囲に合わせた行動がとれず相手からは理解されにくい<sup>10)</sup>ことが、孤立した状態に繋がる原因の一つであると示唆された。

偏差値が51以上60以下の高校における個別支援事例では、逸脱行為を起こすことに関連性が強く示された。このことは、発達の修学困難における不器用さの度合いが高い生徒の支援事例でも、落ち着きのない言動や衝動的な言動および欲求が抑えられずに行動してしまう等の行動が確認された。長村<sup>9)</sup>は、女性において多動・衝動性の傾向がある場合、周囲の状況を読めずに行動化してしまい、対人関係におけ

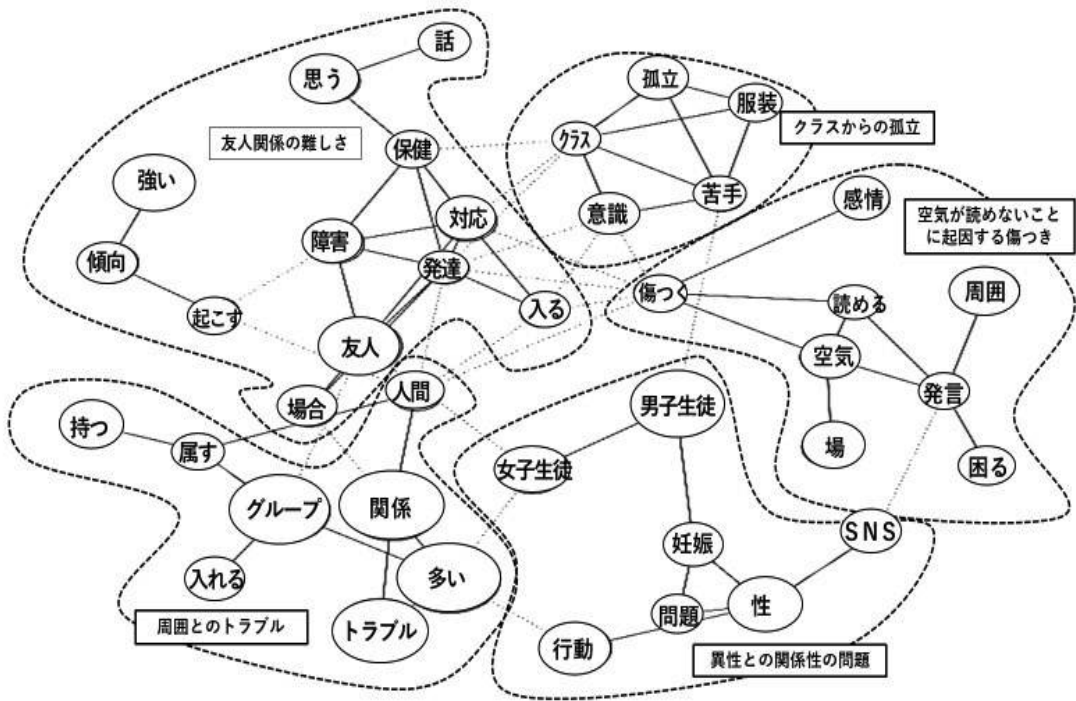


Fig.1 発達障害のある女子高校生の特徴 (n=87)

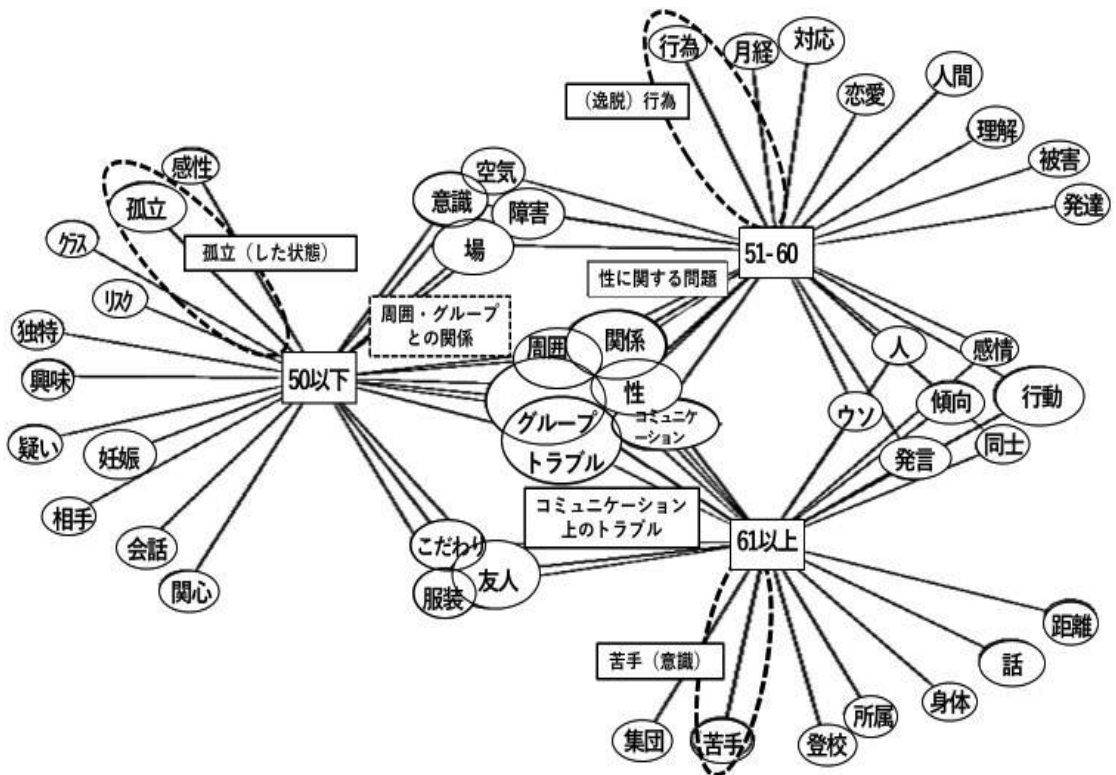


Fig.2 高校入試時の偏差値別による特徴 (n=76)

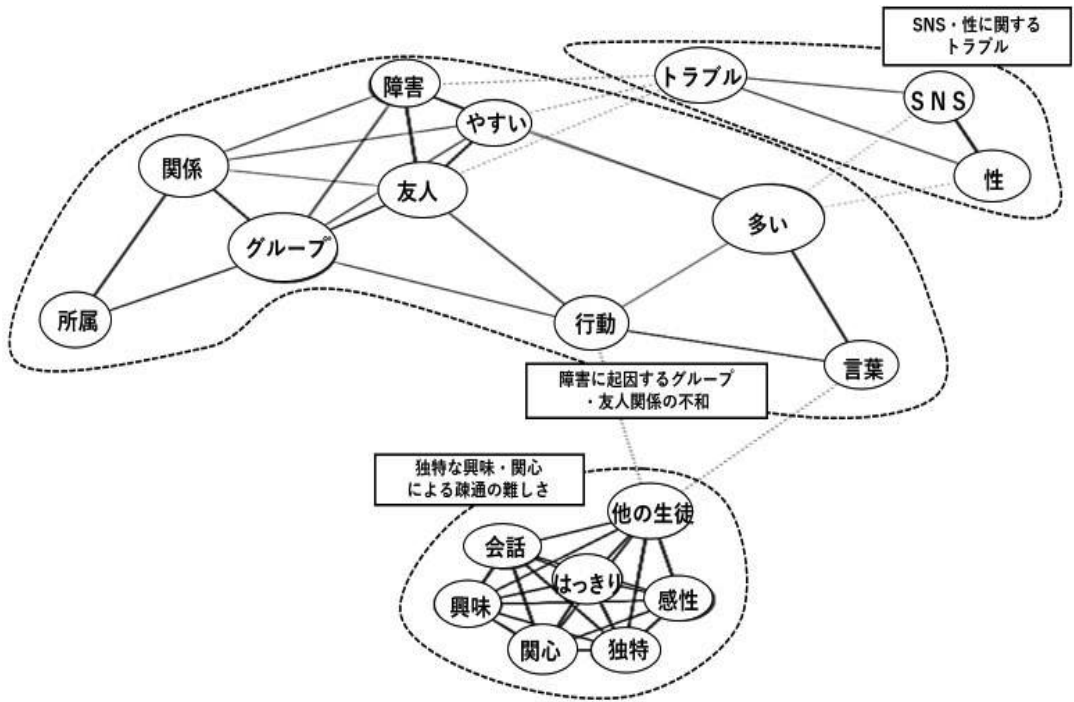


Fig. 3 「友人関係を築くことの困難」因子高得点群の特徴 (n=16)

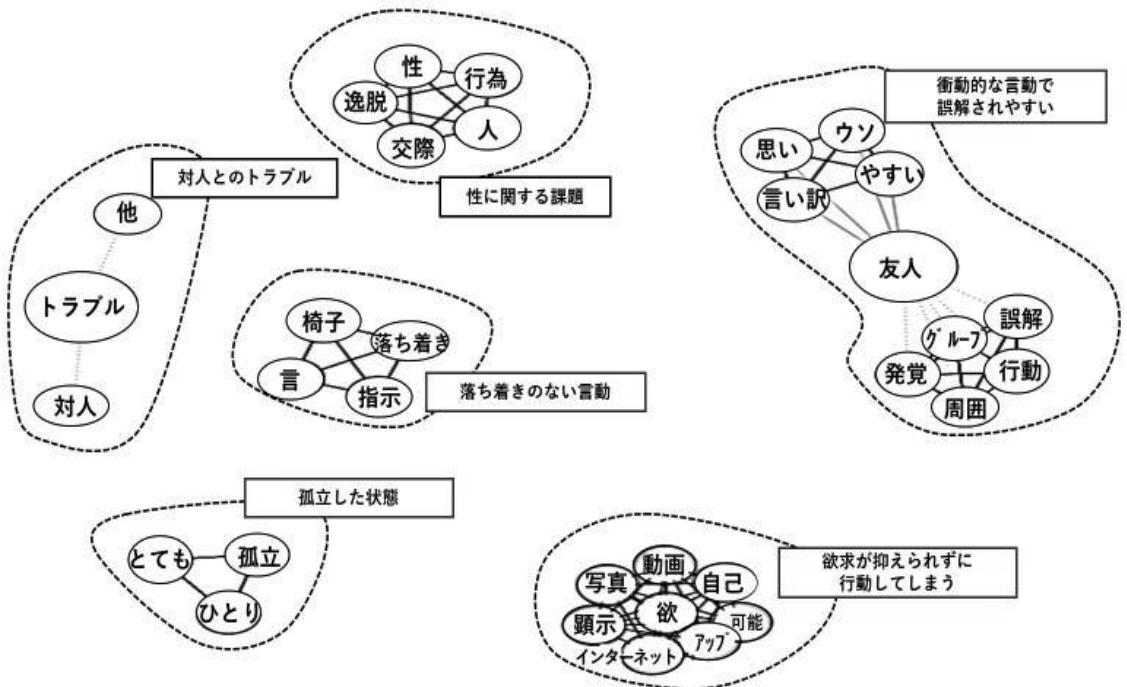


Fig. 4 「修学上の不器用さ」因子高得点群の特徴 (n=9)

る不安を抱きやすい傾向があることを示した。このことから、当該女子高校生は、不器用な困難さも起因して、周囲の活動から逸脱してみえる行動を起こすことで他者から誤解を受けやすく、失敗経験を繰り返し心理的に不安定な状態に陥る可能性が示唆された。

偏差値が 61 以上の高校における個別支援事例では、他者との関わりにおいて苦手意識を抱いていることに関連性が強く示された。このことは、発達の修学困難における友人関係を築くことの困難について度合いが高い生徒の支援事例でも確認された。彼女たちの中には、普通の人に見えるように色々継ぎはぎしてみたが、結局は普通の人にはなれずに毎日辛い日々を過ごすといった事例が存在している<sup>5)</sup>。また、彼女たちは、ある程度自分を客観視できるため、

男子生徒よりよも適応できてしまう人が多いとされる。しかしながら、本人は「頑張っ」て適応しているだけであるため、ストレスが非常に高いことが指摘されている<sup>5)</sup>。このことから、学力が高いとされる当該女子高校生は、自身の特性を自覚し改善に努めるが、適応出来ないことによって引き起こされた心理的問題への対応が必要になる<sup>6)</sup>と示唆された。

さて、偏差値や修学上の困難さ等の外部変数を踏まえ、発達障害のある女子高校生の実態に共通した特徴として、性(異性との関係を含む)に関する不適応状況も確認された。坂本・比志<sup>10)</sup>は彼女らなりの独特な戦術で相手の考えを推測しているため、むしろ誤った了解や関係念慮を引き起こしてしまうことをあげている。特に、異性との関わりについて、恋愛という、誰

Table 1 発達の修学困難チェックシートの結果(n=161)

	偏差値	50以下	51-60	61以上	合計	F値(df)	
<b>因子1 友人関係を築くことの困難(<math>\alpha=.70</math>)</b>	平均値	10.42	9.90	9.76	9.96	0.66	n.s.
	SD	2.87	3.48	2.75	2.98	(2,139)	
場の雰囲気を読んでそれに合わせることができず、周囲から浮いてしまう	平均値	2.55	2.29	2.33	2.36	2.15	n.s.
	SD	0.68	0.74	0.74	0.75	(2,139)	
周囲の人から孤立してしまい、友人ができにくい	平均値	2.36	2.21	2.27	2.30	0.38	n.s.
	SD	0.77	1.00	0.80	0.82	(2,139)	
人と会話することが非常に苦手だ	平均値	1.85	1.93	1.82	1.84	0.13	n.s.
	SD	1.02	1.05	0.88	0.97	(2,139)	
急な予定変更などがあると、どうしていいかわからなくなってしまう	平均値	1.97	1.69	1.67	1.81	1.79	n.s.
	SD	0.92	0.87	0.96	0.92	(2,139)	
人と話す時に何を話していいかわからなくなり、思考が止まってしまう	平均値	1.69	1.79	1.67	1.65	0.19	n.s.
	SD	0.97	0.95	0.92	0.94	(2,139)	
<b>因子2 修学上の不器用さ(<math>\alpha=.84</math>)</b>	平均値	11.40	10.52	9.59	10.63	1.83	n.s.
	SD	4.22	4.20	5.02	4.43	(2,134)	
二つ以上の作業を同時にこなそうとすると、混乱してしまう	平均値	2.02	1.81	1.69	1.88	1.42	n.s.
	SD	0.98	0.83	1.03	0.95	(2,135)	
教師の指示を聞き逃すことや、メモをしないうちに忘れてしまうことが多い	平均値	2.01	1.79	1.69	1.86	1.46	n.s.
	SD	0.90	1.02	1.06	0.96	(2,138)	
急な予定変更などがあると、どうしていいかわからなくなってしまう	平均値	1.97	1.69	1.67	1.81	1.79	n.s.
	SD	0.92	0.87	0.96	0.92	(2,139)	
課題をするとき、具体的にやる事が指示されていればできるが、自分で考えなさいと言われると全く出来なくなる	平均値	1.94	1.81	1.50	1.79	2.79	n.s.
	SD	0.84	0.80	0.98	0.87	(2,137)	
スケジュール管理が苦手で、締め切りを守れないことがとても多い	平均値	1.91	1.83	1.69	1.78	0.58	n.s.
	SD	0.94	0.93	1.00	0.94	(2,137)	
黒板を写しながら、同時に話を聴いて理解することが難しい	平均値	1.68	1.60	1.38	1.57	1.11	n.s.
	SD	0.90	0.96	0.98	0.94	(2,136)	

もが平静ではいられない感情体験の中では、彼女たちの認知の歪みは極端になりやすいと述べている。そして、異性との心理的な距離がうまくとれず、相手との関係においてこだわりが強く思い込みで執着してしまったり、やりとりの細部に注意が行くと全体が見えなくなって混乱し、事柄の優先順位をつけられないため相手と適切に絡むことが難しいと指摘している。また、相手が話すことの裏の意味や、相手との関係が文脈や雰囲気などから自然に読み取れないために、結局だまされてしまう可能性も危惧されている。性的な被害をいかに予防するかという点と、周囲の関係性が変わる中で、どう関係を構築するか<sup>2)</sup>という点が課題として示唆された。

## 2. 発達障害のある女子高校生に対する適切な支援の展望

近年における学校適応に関する研究では、高等学校を一括りにするのではなく、学校のタイプを考慮した検討の重要性が指摘されている<sup>1)</sup>。本研究においても、高校入試時における偏差値を外部変数とした、発達障害のある女子高校生の実態の相違について把握することを試みた。偏差値によって「周囲からの孤立」や「逸脱行動」といった現象にアプローチする群と、「苦手意識」といった心理的問題にアプローチする群に大別されることが示唆された。それぞれの学校のタイプに応じて、重点を置く支援内容を考慮することが、より適切な支援実践に繋がると推察する。

また、発達障害のある女子高校生の実態に共通して、学校不適応の状況に対してストレスを感じ、精神的に傷ついていることが推測された。彼女らは女性として生きるライフサイクルのなかで、社会的に求められる期待(学校生活における適応)と、特性による難しさの中で、適応の努力と失敗を繰り返すことで、表面的には社会で適応しているようなスキルを獲得するものの、失敗体験と自己否定的な原因帰属の積み重ねによって、自尊感情の低下が起こっていることが明らかとなっている<sup>11)</sup>。そこで、特性から派生する二次的な心理的問題である、傷つきや迷い等は単一の理解で対応するのではなく、「出来ない」と自覚しているところに直接関わり<sup>11)</sup>、個人を尊重して全人的に関わる<sup>9)</sup>ことが、様々な心理的課題にぶつかる思春期の発達障害のある女子高校生の自尊感情を支えることに繋がると推察する。そして、いつも「分からない」体験をしている当該女子高校生にとって、「分かり合える」他者が存在することは心の支

えとなり、その社会に自分を位置づける(存在できる)ことに繋がる<sup>7)</sup>と考察する。

## 文 献

- 1)藤原和政・河村茂雄(2014)：高校生における学校適応とスクール・モラルとの関連—学校タイプの視点から—。カウンセリング研究 4, 7(4), 196-203.
- 2)川上ちひろ(2012)：女性の ASD の人たちの思春期の支援について。アスペ・エルデの会：Asp heart：広汎性発達障害の明日のために, 10(3), 22-27, アスペ・エルデの会.
- 3)木谷秀勝(2013)：子どもの発達支援と心理アセスメント。金子書房.
- 4)こだまちの(2017)：どうして普通にできないの！—「かくれ」発達障害女子の見えない不安と孤独。協同医書出版社.
- 5)国実アヤコ(2017)：明日もアスペルガーで生きていく。ワニブックス.
- 6)文部科学省(2009)：特別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議高等学校ワーキンググループ報告。http://www.mext.go.jp/b\_menu/shingi/chousa/shotou/054\_2/gaiyou/1283724.htm(2018.12.20 取得).
- 7)毛利真紀(2009)：広汎性発達障害を持つ女子学生との心理面接過程。学生相談研究, 30(1), 1-11.
- 8)長村和美(2008)：ADHD 傾向をもつ大学生に関する心理学的研究—女性の ADHD 傾向と対人恐怖心性、および孤独感に注目して—。福岡女学院大学大学院紀要, 5, 31-38.
- 9)柳楽明子(2017)：高機能自閉症スペクトラム障害者の思春期を支える心理的支援。心理臨床学研究, 35(3), 233-243.
- 10)坂本玲子・比志真美(2015)：アスペルガー症候群を持つ女性の恋愛と性の課題—3つの症例を通して—。山梨県立大学人間福祉学部紀要, 10, 1-9.
- 11)砂川芽吹(2015)：自閉症スペクトラム障害の女性は診断に至るまでにどのように生きてきたのか—障害を見えにくくする要因と適応過程に焦点を当てて—。発達心理学研究, 26(2), 87-97.
- 12)田口禎子・橋本創一(2015)：発達障害・精神疾患およびその傾向がある高等学校生徒支援の実態調査。発達障害研究, 37(2), 186-199.
- 13)高橋智・内野智之(2006)：首都圏の高校等に在籍する軽度知的障害を含む軽度発達障害児の教育実態—高校等 1,344 校への質問紙調査から—。発達障害研究, 28(2), 145-166.

(受稿 2019.6.22, 受理 2019.9.25)